

〔第28回学術集会 シンポジウムI〕

## 26th-27th-28thつながるシンポジウム With Corona時代の家族看護

京都橋大学

名古屋大学大学院

(座長) 河原 宣子 浅野みどり

COVID-19パンデミックなど、まだ予想もしていなかった頃、平成という時代が終わりを告げ、令和が始まる2018年から2019年にかけて、第26回～28回の学術集会長予定者が集まり、一つの企画を立てた。

日本家族看護学会は、家族看護研究の発展における学会の役割と機能をどのようにして構築し、実現していくかについて、かねてより議論していた。ではそのミッションに学術集会としてどう貢献するのか？

そして生まれたのがこのリレーシンポジウムであった。シンポジウムの趣旨は次のように決めて開始した。「誰のために何のために研究するのか？家族看護研究は、この世界に暮らす家族のためである。2019年 令和の時代から始まる3つの学術集会では、家族看護研究における知の創造をめざし、現存する家族看護モデルを検証し、発展へとつなげていく。」

しかし、時代は感染症の脅威にさらされていく。その中で揺らぐ家族看護実践のあり方。第27回学術集会では非日常が日常化していく中での家族看護学の役割を議論することとなった。

リレーシンポジウム最後となる第28回学術集会においても、引き続き「With Corona時代の家族看護」を取り上げた。様々なライフイベントを体験する家族と真摯に向き合う4名のパネリストの報告と家族看護実践の本質を問う貴重な議論が展開された。

大橋優紀子氏からは、「コロナ禍における周産期の女性と家族への心理社会的支援」について、予期せぬ妊娠等に関する実態調査の結果を踏まえた女性の健康への適切な支援提供体制のあり方が報告された。

市川百香里氏からは、「コロナ禍での医療ケア児

とその家族」について、重症心身障がい在宅支援センターでの実践を通し、感染対策が親子関係や日々のケアに及ぼす影響と看護の実際が報告された。

松本佐知子氏からは、「コロナ禍における高齢者ケア施設での高齢者と家族の関わりでの支援」について、高齢者複合施設での感染対策の実際と面会制限・禁止という壁に立ち向かう実践が報告された。

藤原紀子氏からは、「終末期における家族看護」について、がんで入院されている患者における事例をもとに面会制限や禁止の中、入院生活を支える看護実践について報告された。

いずれの報告からも、そして参加者の皆様とのディスカッションからも見えてきたことがある。

当たり前だと思っていた家族の存在と看護のあり方が現在のように抗えない外的要因で変化した時、当たり前の大切さを再認識し、当たり前ではなくなった事態に葛藤する。しかし、どのような状況であっても、家族の存在に関心を寄せ、目の前で苦悩する家族に看護は何を提供できるのか？について、知恵と技を振り絞って向き合う力を看護は有しているのだとわかった。パネリストの皆さんは、ジレンマを抱えながらも最善策を講じるために工夫を凝らし、時には折り合いを付けながらすべての家族と向き合っていた。シンポジウムに参加した全員が勇気をいただき、看護の本質を改めて問うた時間を共有した。

このシンポジウムを企画した3年前。私たちが目指した目標に、一筋の光と道標が見えた瞬間でもあった。

最後に、パネリストの皆様、ご参加いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。